

## 第二章 おもいやりの連歌

### 連歌の心得

室町時代当時の連歌、古典研究の第一人者であった連歌師宗祇は、連歌座に参加する連衆(れんじゅう)の心得として仁(おもいやり)・礼(礼儀)・和(なごやかに)を中心として多くの決まり事を定め、日本独自の「座の文芸」である連歌を発展させ、その精神は今日に至っています。まずは、座の雰囲気(なご)を和(なご)しく失礼のないよう気配りすることを心がけなければなりません。連歌をすることで、他人に対する心配りを身につける事ができるという点からも大事なことです。次にその留意点を挙げてみます。

- 一、連歌の開始時間を守ること。 開始時間に遅刻するのは厳しく戒められている。
- 二、着席の位置 宗匠・執筆(しゅひつ)を上座に連歌巧者と並び、初心者が上座に位置する事は好ましくないとされている。
- 三、連衆は宗匠・執筆を差し置いて他人の句の差し合いを指摘しないのが礼儀とされている。 ややもすると、宗匠・執筆をないがしろにして、自分の句を押しつけようとする傾向があったりする事は謹まなければならない。
- 四、人が句を考えている時に大声を出したり居眠りをしたり、あくびをする、そば笑い、雑談する等は慎まなければならない。
- 五、自分の句に人が付句をしている時に席をたたない。
- 六、一直(いっちょく:一度の手直し)は構わないが、何度も手直し他直しをして座の進行を妨げない。
- 七、初心者が句数(くかず)にこだわり、よろしくない句を臆する事なく出すのは恥ずかしい事だと戒めている。
- 八、雪・月・花等、最も重要な景物(けいぶつ)とされている句を初心者が出すのは控えなければならない。
- 九、熟練者が句を詠もうとしている時に才知の乏しい人が横から句をつけるのはよくない。
- 十、度々句を直すのは恥と思う事。
- 十一、連歌会にふさわしくない句(難句・品格のない句)、拙い句をどんどん出すのは差し控えなければならない。
- 十二、前の句を生かした付が上手の句とされている。
- 十三、句を出す場合、自分の中で句がまとまってから出すこと。出勝(でが)ちの場合、先を急ぐあまり半分だけ作った句を出し、後で、ああでもないこうでもないと考えを変えるのは、座の連衆に大変失礼な事であり、慎む事。

### おもいやりの心

今では花の定座(じょうざ)、月の定座(じょうざ)といって、花の句や月の句を詠む場所が決め

られています。もともとは、そうではありません。花や月といった「重要な景物」を他人を差し置いて自分から出すのは、はしたないという遠慮から、だんだんと懐紙の面(おもて)の後ろの方にまで誰も出さないことが起こります。それ故、もうここで出さないと花の句が詠めなくなる、という場所(初折(しよおり)だ)と最後の長句になる裏の十三句目で、その場の大切な人に花の句を詠んでもらうことになります。いわゆる「花を持たせる」の語源ですが、これも「おもいやりの心」がなせるところでしょう。

また、連歌の座は、一座に集まった連衆が心を合わせて一つの作品を作り上げていくところにその醍醐味があります。みんなが楽しむことが大事です。上手は人も慣れない初心者も同じ仲間です。上手な句だけが取り上げられることになると、初心者は一句も出せないかも知れません。あまりこの人の句が出ていないと思うと、周りではその人にあえて詠んでもらうために時間をあける事もあります。大和言葉、大和言葉と強調されることで萎縮してしまうこともあります。そんな時には、この句あたりでは現代語も使っていいんですよ、と規定を緩めることも必要でしょう。ああ、それもありなんだと、初心者は心安らかに句作りをすることができます。

それもこれも、みんなが座の運営についての心得を体得したうえでこそ出来る「おもてやり」ではないでしょうか。